人間社会デザインコース専門教育科目，環境地理学

フィールドワークと文献学習が結びついた地域理解にむけて

社会科専修・川瀬久美子

１．授業の概要

本授業の目的は「ルポルタージュや研究論文を講読しながら、人間が自然環境と対峙するなかで時には自然災害と立ち向かいながら、地域固有の文化をはぐくんできたことを学ぶ。また、近現代の人間活動による自然破壊が、どのように地域社会に跳ね返って混乱を引き起こしたのかについても知る。その過程で、私達が今後どのように自然とつきあって行くべきか、思考を深める。」というものである。

授業の到達目標は以下の３点である。

①自然と人間の関係の事例について、説明することができる。

②自然と人間の望ましい関係について、自分の考えを表現することができる。

③これまでの、また、これからの自然と人間の関わりに関心を持つ。

本授業は、人間社会デザインコースのディプロマ・ポリシーのうち、

①共生社会を築くため，地域・福祉・平和に関する幅広い知識と，得意とする分野の専門的知識を修得している。（知識・理解）

②地域・福祉・平和をめぐる現代社会における諸問題に関心を持ち，これらの問題に取り組むための理論と実践を結びつけた主体的な学習ができる。（関心・意欲）

の２点に焦点を当てて実践された。

25 年度の授業は，人間社会デザインコースの三回生９名が受講した。

今年度の授業では，熊本県水俣市および水俣病をテーマに定め、文献学習とフィールドワーク（以下 FW）を行った。水俣病をテーマとした理由は、水俣病が「チッソ」の企業城下町という特性をもつ地域で発生し、その土地の風土や経済史などの地理的理解と関連づけて公害を考えるのに適切な事例であること、水俣病が漁業という生業を通して発生し生業そのものに大きな打撃を与えたこと、すなわち人と環境の関係について深く考えさせる題材であること、などによる。

授業では、まず水俣病発生時および最近の水俣病患者を取り巻く状況に関する映像資料を視聴した。受講生の水俣病に関する問題意識を高めた後、水俣病の病理、発生の経緯、報道の有り様、などいくつかの小テーマを設定し、各受講生が文献やインターネットから情報を得て整理し、授業で報告した。それらの事前学習の後、6 月 28 日（金）夜～7 月 1 日（月）朝にかけて、フェリーと自動車を利用して水俣を訪問し、ＦＷを行った。ＦＷでは水俣市立資料館の見学、水俣病の語り部（緒方正実さん）の講話聴講、水俣病患者激発地、水俣病歴史考証館、エコパーク、無田湿原、など各所の見学を行った。

FW に参加した受講生は 6 人で、FW 終了後の授業では、参加できなかった学生に向けて FW の報告を参加者が行った。また、水俣病の学習を踏まえて、それ以外の環境問題について各自がテーマ設定をして報告を行い、授業を終了した。

２．授業評価アンケート結果

授業の最終日に，受講生に対して授業について授業評価アンケートを行った。アンケートは（1）授業の良かった点　（2）授業の改善して欲しい点　(3) 授業の感想や意見　の３項目について、自由記述式で行った。最終日に出席していた受講生７名から回答を得た。以下、その全回答の要約を記す。

１）良かった点

・本と実践がよくつながっていた。全員協力できて共同研究ができた。

・事前学習の後、討論をして FW に行った点。一人一人に報告の担当があったこと（グループ担当だとやらない人が出てくる）。

・下調べをした後に実際に現地に行くということで、頭に残り、非常にためになった。

・実際に現地で FW ができた。とても重要な事柄が学べた（チッソと市民の関係）。FW にあまりお金がかからなかった。

・一人一人でそれぞれが別々のテーマで水俣（病）について調べられたのがよかった。

・実際に現地へ出向いて学習できたこと。

２）授業の改善すべき点や改善案

・環境地理学の基礎知識に関するお勧めの本を読みたい。

・もう少し話し合いの場があれば良かった。

・もう少し時間に余裕があればよかった。

・もう少し議論したかった。

３）感想・意見

・水俣に実際に行けたことは本当に良かった。少

人数であったのも嬉しかった。
・ここまで一つのことについて深く学べた授業はこれが初めてでした。ありがとうございました。
・特に FW が良かった。現地に行ってはじめて分かることや､多くの資料館や施設をまわれたので、実際の雰囲気に少しでも近づくことができたので良かった。
・今回、「水俣」だけにしぼって学ぶことができたので、かなり知識的に理解が深まったと思う。いろいろなことを学ぶこともいいと思うが、一つのことに集中して学ぶ機会はなかなかないので、とても良い経験になった。
・大学での資料を通しての学習では分からなかったであろうことも学習できてよかった。教員になったら教えたいと思えることも見つかった。

３．学習の効果に関するアンケート

授業評価アンケートと同時に、「授業を通して水俣という地域と水俣病のイメージや理解に変化があっただろうか」という問いかけで、自由記述式のアンケートをおこなった。以下はその記述の要約である。

１）水俣
・チッソの影響力がここまで大きなものだとは思っていなかった。市民の多数が従業員であったことや、工場長が市長になっていたことなどが、解決まで時間がかかったことに関係しているのではないか。
・水俣といえば水俣病というイメージしかなく、どのあたりに立地していてどんなまちなのか、全く知らなかった。しかし、実際、おとずれてみて、まちの雰囲気、環境モデル都市としての取り組みなど書ききれないが多くの発見があった。
・「水俣」＝「水俣病」というイメージだったが、そのイメージを持つことはよくないと思った。行っていないため詳しく述べられないが、チッソという会社は決して「昔の会社」ではなく、水俣に今でも存在する会社であることもわかった。
・漁業が盛んでそれが水俣病拡大の一因になったこと、高齢者が多いこと、海岸の地形によって被害に特徴があったこと（湾にヘドロがたまった）。
・本当に暗いイメージ、遠い存在だったが、実際に行ってみると様々な取り組みをしていて、驚いた。身近に感じることができた。また、“チッソ”とともに成長してきたのだと感じた。
・水俣という地域では、数十年前の暗い過去を消し去るようにヘドロだった海が埋め立てられたりしているが、現在は多くの施設も建てられ、水俣病で苦しめられた人たちの苦しみを無駄にしないような、水俣の人たちの思いがつまった活動も行われている。
・水俣市はいま市内の資料館や考証館など教育面でとても効果的なことをしていると感じた。

２）水俣病
・高校までに、教科書で少し学んだだけの、ほぼゼロに近い知識で授業に臨んだので、多くのことを学んだと同時に衝撃も大きかった。
・過去の病気、出来事という認識だったが、今でも続いている、苦しんでいる人はいる、ということを思い知らされました。人の一生にかかわる大きな出来事であったことを決して忘れてはならないと感じた。
・水俣病に関して、公害病の一つという認識しかなかったが、実際に調べてみると、差別、訴訟、報道など様々な問題をはらんでいることがわかった。私はマスコミとの関係を調べていく中で、当たり前に報道されているわけではないことや、マスコミの与える影響など、改めて知ることができた。
・水俣病という言葉しか知らなかったが、水俣病の恐ろしさを知った。差別の対象となっていたこと。
・水俣病は教科書のイメージしかなく、症状もあまり変わらないと思っていた。しかし、実際は一人ひとり症状は異なり、環境も異なり、多様であることがわかった。また、“チッソ”に対する思いも批判だけではなかったところに正直驚いた。
・現在でも水俣病によって心に傷を抱えながら生活している人もいるなかで、同じような悲劇を繰り返さないよう、後世に伝えている人たちも多くいて、私たちもその声に耳を傾けて考えていくべきだと強く思った。
・水俣病は水俣の人々に深い傷をつけただけではなく、世界の他の地域で汚染が起こっている。もっと遠いことと考えていた。

４．総括

今回、水俣および水俣病を題材としたことで、一つの地域とそこで起こった事象について深く学ぶことができたという評価が高かった。しかし、水俣病事件では「患者 vs 企業」「地域社会の中での患者 vs 非患者」という対立が悲惨を極めたため、「社会システムの問題としての環境問題」という理解が深まった一方、自然と人間の関係についての議論や検討はあまりなされなかった。その点では、ディプロマポリシーとは深く繋がった授業となったが、授業の目的・到達目標と授業内容にズレが生じた。授業そのものについては大きな手応えがあったため、到達目標を修正して次年度に望みたい。